

悲しき玩具

—一握の砂以後—

石川啄木

青空文庫

呼吸いきすれば、

胸うちの中にて鳴る音あり。

冨こがらしよりもさびしきその音おと！

眼めと閉とづれど、

心にかぶ何もなし。

さびしくも、また、眼をあけるかな。

途中にてふと気が変り、

つとめ先を休みて、今日も、

河岸かしをさまよへり。

咽喉のどがかわき、

まだ起きてゐる果物屋くだものやを探しに行きぬ。

秋の夜ふけに。

遊びに出で子供かへらず、

取り出して

走らせて見る玩具おもちゃの機関車。

本を買ひたし、本を買ひたしと、
あてつけのつもりではなけれど、
妻に言ひてみる。

旅を思ふを夫の心！

叱り、泣く、妻子つまこの心！

朝の食卓！

家を出て五町ばかりは、

用のある人のごとくに

歩いてみたれど――

痛む齒をおさへつつ、

日が赤赤と、

冬の霽もやの中にのぼるを見たり。

いつまでも歩いてるねばならぬごとき

思ひ湧わき来きぬ、

深夜の町まちまち。

なつかしき冬の朝かな。

湯をのめば、

湯気ゆげがやはらかに、顔にかかれり。

何^{なん}となく、

今朝^{けさ}は少しく、わが心明るきごとし。
手の爪^{つめ}を切る。

うつとりと

本の挿^{さし}絵^ゑに眺^{なが}め入り、
煙草^{たばこ}の煙吹きかけてみる。

途中^{ちゆうちゆう}にて乗^{のり}換^{かへ}の電車^{でんしゃ}なくなりしに、

泣^なかうかと思^{おも}ひき。

雨^{あめ}も降りてゐき。

一^{ふた}二^{ぼん}晩^{ばん}おきに、

夜^よの一時^{きりどほし}頃に切^{きり}通^{どほし}の坂^{のぼ}を上^{のぼ}りしも――
勤^{つと}めなればかな。

しつとりと

酒のかをりにひたりたる

脳の重みを感じて帰る。

けふ
今日もまた酒のめるかな！

酒のめば

胸のむかつく癖くせを知りつつ。

何事か今我つぶやけり。

かく思ひ、

目をうちつぶり、酔よひを味あじはふ。

すつきりと酔ひのさめたる心地こころちよさよ！

夜中に起きて、

墨^{すみ}を磨^するかな。

真夜中の出窓^{でまど}に出^いでて、

欄干^{らんかん}の霜^{しも}に

手先^てを冷^ひやしけるかな。

どうなりと勝手^{がて}になれといふ^いふ^ふとき

わがこのごろを

ひとり恐^{おそ}るる。

手も足もはなればなれにある^ある^るとき

ものうき寝覚^{ねさめ}!

かなしき寝覚^{ねさめ}!

朝^あな朝^あな

撫^なでてかなしむ、
下にして寝^{はう}た方の腿^{もも}のかるきしびれを。

曠^{あらの}野ゆく汽車のごとくに、

このなやみ、

ときどき我の心を通る。

みすぼらしき郷^{くに}里の新聞ひろげつつ、

誤^{ごしよく}植ひろへり。

今朝のかなしみ。

誰^{たれ}か我を

思^{ぞんぶんしか}ふ存分叱りつくる人あれと思ふ。

何^{なん}の心ぞ。

何がなく

はつこひびと
初恋人のおくつきに詣づることし。
郊外きに来ぬ。

なつかしき

故郷にかへる思ひあり、

久し振ぶりにて汽車に乗りしに。

新しき明日あすの来きたるを信ずといふ

自分の言葉に

嘘うそはなけれど――

考へれば、

ほんとに欲ほしと思ふこと有るやうで無し。
煙管きせるをみがく。

今日ひよいいと山が恋しくて

山きに来ぬ。

去年腰掛こしかけし石をさがすかな。

朝寝して新聞読む間まなかりしを

負債ふさいのごとく

今日も感ずる。

よごれたる手をみる——

ちやうど

この頃の自分の心むかに対むかふがごとし。

よごれたる手を洗ひし時の

かすかなる満足が

今日の満足なりき。

年明けてゆるめる心！

うつとりと

来し方^{かた}をすべて忘れしごとし。

昨日まで朝から晩^{ばん}まで張りつめし

あのころもち

忘れじと思へど。

戸の面^もには羽子^{はね}突^つく音す。

笑う声す。

去年の正月にかへれるごとし。

何となく、

今年はよい事あるごとし。
元日の朝、晴れて風無し。

腹の底より欠伸あくびもよほし
ながながと欠伸してみぬ、
今年の元日。

いつの年も、
似たよな歌を二つ三つ
年賀の文ふみに書いてよこす友。

正月よっかの四日になりて
あの人
年ねんに一度の葉書はがきも来にけり。

世におこなひがたき事のみ考へる
われの頭よ！
今年もしかるか。

人がみな
同じ方角はうがくに向いて行く。
それを横より見てゐる心。

いつまでか、
この見飽きたる懸額かけがくを
このまま懸けておくことやらむ。

ぢりぢりと、
蠟燭ろうそくの燃えつくるごとく、
夜となりたる大晦日おほみそかかな。

青塗あをぬりの瀬戸の火鉢によりかかり、
眼閉とぢ、眼を開あけ、
時を惜をしめり。

何なんとなく明日はよき事あるごとく
思ふ心を
叱しかりて眠る。

過ぎゆける一年のつかれ出でしものか、
元日といふに
うとうと眠し。

それとなく
その由よるところ悲しまる、

元日の午後の眠^{ねむ}たき心。

ぢつとして、

蜜柑^{みかん}のつゆに染まりたる爪^{つめ}を見つむる

心もとなさ！

手を打ちて

眠^{ねむ}気の返事きくまでの

そのもどかしさに似たるもどかしさ！

やみがたき用を忘れ来^きぬ——

途中にて口に入れたる

ゼムのためなりし。

すつぽりと蒲団^{ふとん}をかぶり、

足をちぢめ、

舌を出してみぬ、誰たれにともなしに。

いつしかに正月も過ぎて、

わが生活くらしが

またもとの道にはまり来きたれり。

神様と議論して泣きし——

あの夢よ！

四日かばかりも前の朝なりし。

家いへにかへる時間となるを、

ただ一つの待つことにして、

今日も働けり。

いろいろの人の思はく

はかりかねて、

今日もおとなしく暮らしたるかな。

おれが若しこの新聞の主筆ならば、

やらむ——と思ひし

いろいろの事！

石狩の空知郡の

牧場のお嫁さんより送り来し

バタかな。

外 套の襟に頤を埋め、

夜ふけに立どまりて聞く。

よく似た声かな。

Yといふ符牒ふてふ、
古日記ふるにつきの処しましよにあり——
Yとはあの人の事なりしかな。

百姓の多くは酒をやめしといふ。
もつと困こまらば、
何をやめるらむ。

目さまして直すぐの心よ！
年よりの家出の記事にも
涙出いでたり。

人とともに事をはかるに
適てきせざる、

わが性格を思ふ寢覚ねざめかな。

何なにとなく、

案外あんがいに多き気もせらる、

自分と同じこと思ふ人。

自分よりも年若き人に、

半日も気焰きえんを吐はきて、

つかれし心！

珍めづらしく、今日は、

議会ののしを罵りつつ涙出いでたり。

うれしと思ふ。

ひと晩に咲かせてみむと、

梅の鉢はちを火に焙あぶりしが、
咲かざりしかな。

あやまちて茶碗をこはし、
物をこはす気持のよさを、
今朝けさも思へる。

猫の耳を引っぱりてみて、
にやと啼なけば、
びつくりして喜ぶ子供の顔かな。

何故なぜかうかとなさけなくなり、
弱い心を何度しばしばも叱しかり、
金かりに行く。

待てど待てど、

来る筈はずの人の来ぬ日なりき、
机の位置を此処ここに変へしは。

古新聞！

おやここにおれの歌の事を賞ほめて書いてあり、
二三行ぎやうなれど。

引越しの朝の足もとに落ちてゐぬ、

女の写真！

忘れゐし写真！

その頃は気もつかざりし

仮かな名ちがひの多きことかな、
昔の恋こひぶみ文！

はちねんぜん
八年前の

今のわが妻の手紙の束たば！

どこどこに蔵しまひしかと気にかかるかな。

眠くられぬ癖せのかなしさよ！

すこしでも

眠ねむけがさせば、うろたへて寝る。

笑ふにも笑はれざりき——

長いこと捜さがしたナイフの

手うちの中にありしに。

この四五年、

空を仰あふぐといふことが一度もなかりき。

かうもなるものか？

原稿紙にでなくては

字を書かぬものと、

かたく信ずる我が児このあどけなさ！

どうかかうか、今月も無事ぶじに暮らしたりと、

外ほかに欲ほもなき

晦日みそかの晩かな。

あの頃はよく嘘うそを言ひき。

平気にてよく嘘を言ひき。

汗あせが出いづるかな。

古手紙よ！

あの男とも、五年前は、
かほど親しく交はりしかな。

名は何と言ひけむ。

姓は鈴木なりき。

今はどうして何処にゐるらむ。

生れたといふ葉書みて、

ひとしきり、

顔をはれやかにしてゐたるかな。

そうれみろ、

あの人も子をこしらへたと、
何か気の済む心地にて寝る。

『石川はふびんな奴だ。』
ときにかう自分で言ひて、
かなしみてみる。

ドア推してひと足出れば、
病人の目にはてもなき
長廊下かな。

重い荷を下したやうな、
気持なりき、
この寝台の上に来ていねしとき。

そんならば生命が欲しくないのかと、
医者に言はれて、
だまりし心！

真夜中にふと目がさめて、
わけもなく泣きたくなりて、
蒲団ふとんをかぶれる。

話しかけて返事のなきに

よく見れば、

泣いてゐたりき、隣の患くわんじや者。

病室の窓にもたれて、

久しぶりに巡査を見たりと、

よろこべるかな。

晴れし日のかなしみの一つ！

病室の窓にもたれて

煙草^{たばこ}を味^{あじ}ふ。

夜おそく何処^{どこ}やらの室^{へや}の騒^{さわ}がしきは
人や死にたらむと、
息をひそむる。

脉^{みやく}をとる看護婦の手の、
あたたかき日あり、
つめたく堅^{かた}き日もあり。

病院に入りて初めての夜^よといふに、
すぐ寝入りしが、
物足らぬかな。

何^{なに}となく自分をえらい人のやうに

思ひてゐたりき。

子供なりしかな。

ふくれたる腹を撫なでつつ、

病院の寝台ねだいに、ひとり、

かなしみであり。

目さませば、からだ痛くて

動かれず。

泣きたくなりて、夜明くるを待つ。

びっしよりと寝汗ねあせ出でてゐる

あけがたの

まだ覚さめやらぬ重きかなしみ。

ぼんやりとした悲しみが、
夜となれば、
寝台の上にそつと来て乗る。

病院の窓によりつつ、
いろいろの人の
元気に歩くを眺む。

もうお前の心底をよく見届けたと、
夢に母来て
泣いてゆきしかな。

思ふこと盗みきかるる如くにて、
つと胸を引きぬ——
聴診器より。

看護婦の徹夜するまで、

わが病^{やま}ひ、

わるくなれとも、ひそかに願へる。

病院に来て、

妻や子をいつくしむ

まことの我にかへりけるかな。

もう嘘^{うそ}をいはじと思ひき——

それは今朝^{けさ}——

今また一つ嘘をいへるかな。

何となく、

自分を嘘のかたまりの如^{ごと}く思ひて、

目をばつぶれる。

今までのことを

みな嘘にしてみれど、

心すこしも慰なぐさまざりき。

軍人になると言ひ出して、

ちちはは
父母に

苦勞させたる昔の我かな。

うつとりとなりて、

劍をさげ、馬にのれる己おのが姿を

胸に描ける。

藤沢といふ代議士を

弟のごとく思ひて、
泣いてやりしかな。

何か一つ

大いなる悪事しておいて、
知らぬ顔してゐたき氣持かな。

ぢつとして寝ていらつしやいと

子供にでもいふがごとくに

医者はいふ日かな。

氷囊の下より

まなこ光らせて、

寝られぬ夜は人をにくめる。

春の雪みだれて降るを

熱のある目に

かなしくも眺め入りたる。

人間のその最大のかなしみが

これかと

ふつと目をばつぶれる。

廻くわいしん診の医者おその遅さよ！

痛みある胸に手をおきて

かたく眼をとつ。

医者ほかの顔色をちつと見し外ほかに

何も見ざりき——

胸つのの痛み募る日。

病^やみてあれば心も弱るらむ！

さまざまの

泣きたきことが胸にあつまる。

寝つつ読む本の重さに

つかれたる

手を休めては、物を思へり。

今日はなぜか、

二度も、三度も、

金^{きん}側^{かた}の時計を一つ欲しと思へり。

いつか是非^{ぜひ}、出^ださんと思ふ本のこと、
表紙のことなど、

妻に語れる。

胸いたみ、

春の雲みぞれの降る日なり。

葉に噎むせて、伏ふして眼をとづ。

あたらしきサラダの色の

うれしさに、

箸はしをとりあげて見は見つれども——

子を叱しかる、あはれ、この心よ。

熱高き日の癖くせとのみ

妻よ、思ふな。

運命の来て乗れるかと

うたがひぬ——
蒲団ふとんの重よき夜半よはの寢覚ねざめに。

たへがたき渴かわき覚おぼゆれど、

手をのべて

林檎りんごとるだにもものうき日かな。

氷囊ぬくのとけて温ぬくめば、

おのづから目がさめ来きたり、

からだ痛める。

いま、夢かんごとりに閑古鳥かんごとりを聞けり。

閑古鳥を忘れざりしが

かなしくあるかな。

ふるさとを出でて五年、
病やまひをえて、

かの閑古鳥を夢にきけるかな。

閑古鳥――

渋しぶ民たみ村むらの山さん莊さうをめぐる林の
あかつきなつかし。

ふるさとの寺の畔ほとりの

ひばの木の

いただきに来て啼なきし閑古鳥！

脈をとる手のふるひこそ

かなしけれ――

医者に叱なぐられし若わかき看護婦！

いつとなく記憶きおくに残りぬ――

Fといふ看護婦の手の

つめたさなども。

はづれまで一度ゆきたしと

思ひゐし

かの病院の長廊下かな。

起きてみて、

また直すぐ寝たくなる時の

力なき眼に愛めでしチュリップ！

堅かたく握にぎるだけの力も無くなりし

やせし我が手の

いとほしさかな。

わが病やまひの

その因よるところ深く且かつ遠きを思ふ。
目をとちて思ふ。

かなしくも、

病やまひいゆるを願はざる心我あに在り。

何なんの心ぞ。

新しきからだを欲しと思ひけり、

手術きずの傷きずの

痕あとを撫なでつつ。

薬のむことを忘るるを、

それとなく、

たのしみに思ふ 長^{なが}病^{やまひ}かな。

ボロオチンといふ露^{ロシ}西^ア亜^な名^なが、

何^な故^ぜともなく、

幾度も思ひ出さるる日なり。

いつとなく我にあゆみ寄り、

手を握り、

またいつとなく去りゆく人^{ひと}人^{びと}！

友も妻もかなしと思ふらし——

病^やみても猶^{なほ}、

革命^{かく}のこと口^{くち}に絶^たたねば。

やや遠きものに思ひし

テロリストの悲しき心も――

近づく日のあり。

かかる目に

すでに幾度いくたび会へることぞ！

成るがままに成れと今は思ふなり。

月に三十円もあれば、田舎あなにては、

楽に暮せると――

ひよつと思へる。

今日もまた胸に痛みあり。

死ぬならば、

ふるさとに行きゆて死なむと思ふ。

いつしかに夏となれりけり。

やみあがりの目にこころよき

雨の明るさ！

病^やみて 四^{しぐわつ}月——

そのときどきに変りたる

くすりの味もなつかしきかな。

病^やみて 四^{しぐわつ}月——

その間^まにも、猶^{なほ}、目に見えて、

わが子の背^せ丈^{たけ}のびしかなしみ。

すこやかに、

背^せ丈^{たけ}のびゆく子を見つつ、

われの日毎ひごとにさびしきは何ぞな。

まくら辺べに子を坐らせて、

まじまじとその顔を見れば、

逃げてゆきしかな。

いつも子を

うるさきものに思ひあひだるし間に、

その子、五歳さいになれり。

その親にも、

親の親にも似るなかれ——

かく汝なが父は思へるぞ、子よ。

かなしきは、

(われもしかりき)

叱れども、打てども泣かぬ児の心なる。

「労働者」「革命」などといふ言葉を

聞きおぼえたる

五歳の子かな。

時として、

あらん限りの声を出し、

唱歌をうたふ子をほめてみる。

何思ひけむ——

玩具おもちゃをすてておとなしく、

わが側そばに来て子の坐りたる。

お菓子貰ふ時も忘れて、

二階より、

町の往来を眺むる子かな。

新しきインクの匂ひ、

目に沁むもかなしや。

いつか庭の青めり。

ひとところ、畳を見つめてありし間の

その思ひを、

妻よ、語れといふか。

あの年のゆく春のころ、

眼をやみてかけし黒眼鏡——

こはしやしにけむ。

薬のむことを忘れて、

ひさしぶりに、

母に叱られしをうれしと思へる。

枕^{まくら}辺の障^{しやうじ}子あけさせて、

空を見る癖^{くせ}もつけるかな――

長き病に。

おとなしき家畜のごとき

心となる、

熱やや高き日のたよりなさ。

何か、かう、書いてみたくなりて、

ペンを取りぬ――

花活はないけの花あたらしき朝。

放はなたれし女のごとく、

わが妻の振舞ふるまふ日なり。

ダリヤを見入る。

あてもなき金かねなどを待つ思ひかな。

寝つ起きつして、

今日も暮したり。

何もかもいやになりゆく

この気持よ。

思ひ出しては煙草たばこを吸ふなり。

或ある市まちにゐし頃の事として、

友の語る

恋がたりに嘘うその交まじるかなしき。

ひさしぶりに、

ふと声を出して笑ひてみぬ——
 蠅はひの両手を揉もむが可を笑かしさに。

胸いたむ日のかなしみも、

かをりよき煙草たばこの如ごとく、
 棄すてがたきかな。

何か一つ騒さわぎを起してみたかりし、

先刻さつきの我を

いとしと思へる。

五歳になる子に、何故ともなく、
ソニヤといふ露西亞名をつけて、
呼びてはよろこぶ。

*

と解けがたき
不和のあひだに身を処して、
ひとりかなしく今日も怒れり。

猫を飼はば、
その猫がまた争ひの種となるらむ、
かなしきわが家。

俺おれひとり下宿屋にやりてくれぬかと、

今日もあやふく、

いひ出いでしかな。

ある日、ふと、やまひを忘れ、

牛なの啼なく真似なをしてみぬ、――

妻つまこ子の留守留守に。

かなしきは我が父！

今日も新聞を読みあきて、

庭こありに小蟻こありと遊あそべり。

ただ一人の

をとこの子なる我はかく育てり。

父母もかなしかるらむ。

茶まで断ちて、

わが平復を祈りたまふ

母の今日また何か怒れる。

今日ひよつと近所の子等と遊びたくなり、

呼べど来らず。

こころむづかし。

やまひ癒えず、

死なず、

ひごと
日毎にこころのみ険しくなれる
ななやつき
七八月かな。

買ひおきし

薬つきたる朝に來し

友のなさけの為替かはせのかなしき。

児を叱れば、

泣いて、寝入りぬ。

口すこしあけし寝顔にさはりてみるかな。

何がなしに

肺たまたが小さくなれる如ごとく思ひて起きぬ——

秋近き朝。

秋近し！

電燈たまたの球のぬくもりの

さはれば指ひふの皮膚ひふに親しき。

ひる寝せし児の枕まくら辺へに

人形を買ひ来てかざり、

ひとり樂しむ。

クリストを人なりといへば、

妹の眼がかなしくも、

われをあはれむ。

縁えん先さきにまくら出させて、

ひさしぶりに、

ゆふべの空にしたしめるかな。

庭のそとを白き犬ゆけり。

ふりむきて、

犬を飼はむと妻にはかれる。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集」2 国木田独歩・石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月7日初版発行

1972（昭和47）年9月10日9版発行

入力：j.utiyaana

校正：浜野智

1998年8月3日公開

2005年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

悲しき玩具

——握の砂以後——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 石川啄木

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>